

# 低体重出身児における乳幼児突然死症候群 ホームモニターを施行した両親への アンケート調査 (分担研究：乳幼児突然死症候群に関する研究)

山南貞夫、奥起久子、田村健一、河野達夫、白井徳満

要約： 都立豊島病院に入院した未熟児、低出生体重児の中で、SIDS対策として退院後ホームモニターを施行した児の両親に対し、アンケート調査をおこなった。多くの親は、突然死についての知識があり、モニターを勧められるまでは、退院後の養育に不安をもっていたことがわかった。ホームモニターはモニターとしての実質的効果のほか、家族に対する教育的効果や心理的負担や不安を軽減する効果がある。今後保健適応や、費用の公的援助、貸与システムの普及などが望まれる。

見出し語： SIDS、ALTE、ホームモニタリング、未熟児、低出生体重児

SIDSの原因はまだ解明されていないが、リスクが高いのはどのような児かは、かなり知られるようになってきた。リスクファクターを有する児に対しては、環境的リスクファクターの除去、児の周辺の人々への教育、ホームモニターの導入などがその予防対策として挙げられる。

ところが、SIDSの犠牲者を個々にながめてみると、却ってリスクファクターの無い児が少なからずみられることが、これら予防対策の前途を一方で暗くしている。どのような網掛けをすれば、最大公約数的に、的確なスクリーニングが可能かは今後の研究課題である。

さて、未熟児、低出生体重児であることは間違

いなくSIDSのリスクファクターの一つであるが、さらに他のいくつかのリスクファクターをも合わせ持つ児に対して、より積極的予防対策をこうじめることは、少なくともつかみどころのない現状のSIDS予防の牙城の一角にせまる具体的な方法として注目される。われわれは、このような観点から、われわれの施設に入院した未熟児、低出生体重児のうち、一定の他のリスクファクターを合わせ持つ児を選択し、家族への特別な教育およびホームモニタリングを施行している。これらがSIDS予防にいかほど寄与しているかを知るには例数の蓄積のための今後の年月が必要である。今回われわれは、ホームモニタリングをstandardizationするに先

立ち、実施した家族へのアンケート調査をおこなったので報告する。

#### 【対象と方法】

1985～92年に都立豊島病院未熟児病棟に入院した未熟児、低出生体重児のうち、表1に示す additional なリスクファクターを有した者28例に対し、SIDS対策として、退院後にホームモニターを施行した。ホームモニター終了後に28例の両親55名に対しアンケート調査をおこなった。対象の28例の内訳は、男児17例、女児11例、在胎週数は25週から40週（平均30週）、出生体重582gから2840g（平均1331g）であった。28例中15例は極小未熟児で、18例には人工呼吸器の装着の既往があった。ホームモニターに使用した機械は、Medical社製無呼吸モニターMR10である。20例については病院からモニターが貸与されたが、8例は自費で購入した。モニターの期間は退院後3ヶ月から12ヶ月（平均5ヶ月）であった。

#### 【結果】

28例中25例（89%）の児の両親、49名から回答があった。ホームモニターについてはほとんどの両親が肯定的に受け止めていた。すなわち、49名中45名（92%）はモニターすることで安心したと

いい、43名（88%）は、モニターによって早く退院ができてよかったと述べた。49名中40名（82%）には、自費で購入する意志があったが、実際に自費購入した8家族を含め、多くが費用の公的補助、貸与システムの整備を望んでいた。

49名中34名（70%）の両親は、児の退院の時点で既にSIDSの知識を有しており、ホームモニターを勧められるまでは、退院後の養育に不安をもっていたことが判明した。

退院に先立ち、このようなリスクを持つ児の両親には、救急蘇生法の講習に参加するよう勧められているが、多くの両親がこれを受講し、積極的な評価をしていた。

#### 【考案】

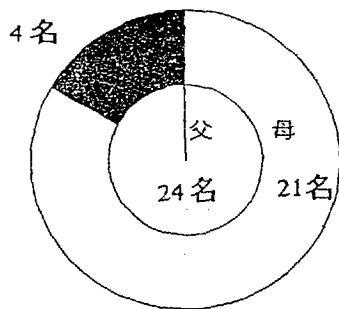
未熟児にSIDSが多いという知識は、かなりの未熟児病棟出身児の親が認識している。かかる両親にホームモニターを勧めることは、モニターとしてのSIDS予防の実効的な効果のみならず、家族にリスクを認識させる教育的効果や両親の心理的負担や不安を軽減させる効果もあり、有意義と思われる。今後は保健適応などの公的認知、費用の公的補助、貸与システムの普及や整備などが望まれる。

表1 ホームモニター施行の理由

|                      |    |
|----------------------|----|
| 頻回の遷延性無呼吸発作          | 18 |
| 中枢神経障害（チアノーゼを繰り返す）   | 3  |
| 哺乳時のチアノーゼ、徐脈         | 2  |
| Cardiorespirogramの異常 | 1  |
| ALTEの既往              | 1  |
| SIDSの同胞              | 1  |
| 気道異常                 | 1  |
| その他（valuable baby）   | 1  |

図1 ホームモニタを勧められて

不安を感じた



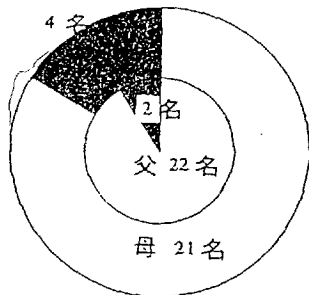
安心した

表2 ホームモニターを施行して一番よかった点は

|                   |     |
|-------------------|-----|
| 夜間、睡眠時の安心         | 45名 |
| なかったらやっていけなかった    | 3名  |
| 泣き声が小さい(長期挿管後の嘔声) |     |
| ので必需品だった          | 1名  |

図2 ホームモニタの是非

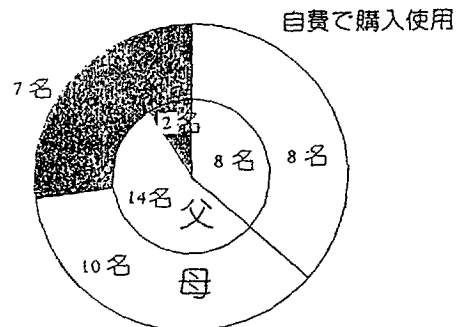
モニター必要期間は病院、施設で



モニターをつけても家庭で育てられてよかった

図3 ホームモニタの入手について (MR-10 20万円として)

借用したが、自費なら断念



借用したが自費でも購入

図4 救急蘇生法の講習への参加

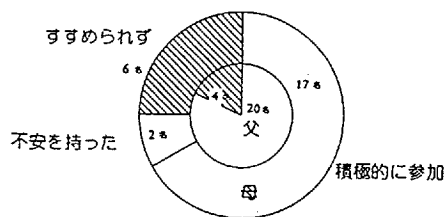
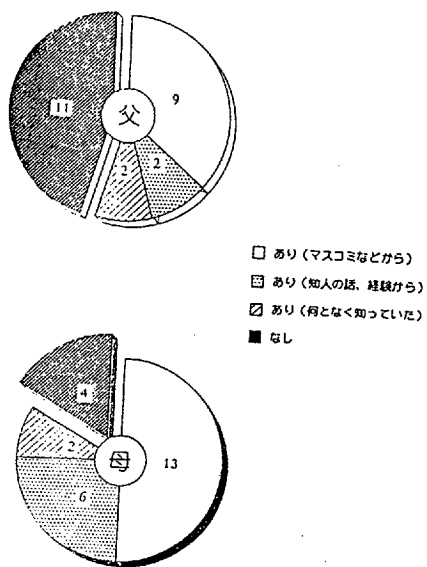


図5 SIDSについての予備知識





## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:都立豊島病院に入院した未熟児、低出生体重児の中で、SIDS 対策として退院後ホームモニターを施行した児の両親に対し、アンケート調査をおこなった。多くの親は、突然死についての知識があり、モニターを勧められるまでは、退院後の養育に不安をもっていたことがわかった。ホームモニターはモニターとしての実質的效果のほか、家族に対する教育的効果や心理的負担や不安を軽減する効果がある。今後保健適応や、費用の公的援助、貸与システムの普及などが望まれる。